

明治四十三年十月下浣起筆

渡魚堂日載

卷一

特別
14
1919
250



夏島日記載卷一十月下説起筆

の坊内道通に於て新島佐左の刺を記し出
 拍一奉目ハ道通心相一奉目之此の物ハ美
 三乘子と云ふ事三回目と云ふ事其説は凡仁左未
 門片桐、等々の幕を流石に盛んする事あり
 石合の物ありと云ふ事と云ふ事と云ふ事
 是の押しと云ふ事其説と云ふ事と云ふ事
 老口を記しと云ふ事結果然る事代々
 前斗の爲と云ふ事致れ道と云ふ事と云ふ事

夏島日記

一之山... 花... 一之山... 花...

○十月十九日秋竹：乘し上巻、故葉の美漸地
今の展覧会を觀る人々も、七海列島に
て古書画の草の節々を雨あぐさる、
故山... 花...

我里... 花...

十牛... 二枚 梅... 子花

六画... 花...

この画... 花...

玉洞山花

松平直之伯

大横花

山雪梅林二幅

徳川吉良

此、梅の花の... 花...

光琳三幅... 花...

大河山花

河部正桓伯

龍山草... 花...

休庵伯

十幅... 花...

カ... 花...

秋... 花...

信玄考(四)

延鎮河古 天竺地

右二に井上郡考を

其の考をのりしるるも七の考を
祀め也 外ニか地遠外無考を

考の古銅梵字銀象眼の大

香炉(火鉢、似る)とあり

或しと

断製の用器の墨蹟

横堀

下條正作

日本の考をのりしるるも七の考を
考の古銅梵字銀象眼の大

光琳画(扇面) 十林文七

此の考をのりしるるも七の考を

とありしるるも七の考を

河到(古)地考(地)の考を

とありしるるも七の考を

信玄の考をのりしるるも七の考を

とありしるるも七の考を

十月廿一日 別紙の如き書あり

青森真津福瑞と稱して旧仙臺領中に古くより傳へし津福瑞
は寛永以前都鄙に遍く行はれ居りしもの上國にて日所く瘡た
獨り仙臺領中に存し居りしもの考へられ明治維新後其遺者
進々凋落し宮城縣名取郡茨ヶ崎村長町に赤井澤館の一と申
す警若生居居りし間此度呼びのほり未を三十一
日(土曜)午後一時過ぎ當校に於て演ぜさせし事には寛永三年
間地方に傳へしものにつき曲節等も解れ訛者ども多々有る
其(ども)寛永以前の古傳福瑞の面影を少しは聞き得べきと
存し抑未聴神下度か但し古風野調のものの由は心はなま
人は佳に嘲弄に附せられし程計固て好左の趣味ある者々
にのみ抑會合を希す此度演劇案内申上り敬具

明治三十三年十月廿一日 東京音楽學校

市島謙吉殿

進て當日は左の次第にすりか

一 眞津福瑞の由緒

文学博士大槻文彦

二 演者

赤井澤館の一

題目

八 島 犬寮節

天神記 かほ一節

御所の鶴 文寮節

大層記 書左の節

唐紙狂進記 文寮節

田ノ學校ヲ出テ自ラ店務其他家政ヲ見ルニ當リ此形勢
 ヲ看破シ新ニ漸次後ヲ取ルニキテ奈シ組織ヲ改メ株
 式合資會社トシ新ニ人物ヲ傭聘シ店舖ヲ歐米ニ
 於ケルコトデパートメントストアノ式ニ改ム等大ニ營業ノ
 發展ヲ企圖スル所アリシガ而カモ之ガ為メ少カラサル資
 金ヲ要シ而シテ其資金一時借入ヲ以テ辦ジアリシヲ以
 テ尙來著シク負債増加シ遂ニ改革ヲ為スルヲ得
 ザル場合ニ到ホセリ茲ニ於テ先般當代主人 正太郎氏
 大隈伯ノ紹介ヲ以テ自ラ向テ懇切ニ助力ヲ求メ
 ルニ至リタル次第ナリ依テ自ラ詳カニ財産及營業ノ
 状態ヲ調査シ第一資産ニ於テ負債ヲ差引タ

ル純財産百餘萬圓ヲ有セラル、事及第二宿弊ヲ
 洗除セバ今後更ニ家運ヲ隆昌ナラシムルヲ得ヘキ事等
 ノ見込相立タルニナラズ折角ノ名家ノ事ミシテ又當代
 主人ノ品性高尚ニシテ相當ノ才幹ヲ有シ居ラレ其懇
 囑黙止難ク茲ニ一臂ノ力ヲ副ヘン事ヲ諾シタル譯
 ナリ其改革方針ニ就テ尚今後講究ノ上追々實行
 ノ事ト為ルニシ

右ハ自ラ下村家ノ整理改革ノ懇望ニ對シカク寄
 セン事ヲ諾シタル顛末ノ概要ナルガ茲ニ貴聞ニ達シ以テ
 諸君ノ御同情ヲ同家ニ共ヘラレン事ヲ希望スル所
 ナリ

砥のちやまの俣と高かつく言くと執味止るん
 りのふゆまう味うまの却りて木味や味を
 入帆りのゆこのそむく風韻のあつたゆあや
 七ちうく味あつたあつたしりて得たゆ
 うてえ張る味あつたの目とゆ代のあつた木味
 草やう才一であるゆゆゆ七張るまをどち
 らふとゆうしくまゆゆしりうく真のち中
 入無くまゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 一本得たゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

しい高ひある竹葉のちよひ穂う元手式ひゆの
 と大く程くまゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 の鞠の折まうたをゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 表のい、ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 漆に塗つたゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 珠くしいゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 一本ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 と細ちよこゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 比字もゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 流ゆゆゆ朱の、皇流の圓を描くゆゆゆゆゆ

の地へ龍を彫つて皇を入らぬことを獲とす
地の方より路をくくえある、まじい二十餘をさ
千入り入るるのく積りしお十を位とすんはこ
んもすくく夫と名とするべきいふひある
至湯家の草や及たつと一衣にる四もす
朱の草やを名をたあつとてエううてはさ
自今とすんうと其似う出果あるい又まを
しあひ、まんをもしもく味のあるいふを多
くあつてし飾草の衣匠を味つて元はく思
ふのひある併し堆朱丈とたあつと作るひるけ

凡の草やのひ此一本りうと十五田とらふ大を
をえんた、こんらるるうもすうく、まを
併しあ、しむう身を入るんはとすんは
の大家ふとすうと、とまの味家りあひ
時節柄ひある、うと(十月廿一)而忘るる
うとく、草を玩ひつとある(う)

十月廿二の 用ゝの为坊々入出て例の如く草木
方々三々うう園くあひあ四葉胡自草十の物本
二冊を獲とす一と備忘能お迄家草とわ
まをすし 杉山博中集の保衛、中白川久

凡納五印左の行状、近代活版の武意(六)を録、按者
を載す、無界紙を致す、いふに、一と一、於抄
と題、寄る、二と目也、河片、詞、紀、也、善、海、私
識、後、石、川、机、河、為、明、敏、傳、吉、中、松、造、達、之、お
と、ぬ、五、善、海、私、識、之、境、又、世、弘、の、文、ろ、と、安、井
息、軒、の、如、事、也、ある、行、を、其、原、言、し、あ、と、此、後
の、自、中、本、方、今、珠、也、と、し、價、極、め、高、き、と
い、ふ、借、う、ん、十、四、の、元、さ、る、價、と、以、つ、て、辨、ひ、ら、れ、
る、と、考、と、謂、ふ、也、外、又、一、冊、添、入、ち、其、其、園
此、記、按、紀、也、善、首、の、中、川、院、の、字、し、し、と、按、彩

毛の園、あ、り、列、候、の、題、記、也、あ、ら、る、其、原、
成、信、司、直、の、按、之、り、と、是、ん、と、六、珠、也、
同、ゆ、く、早、目、書、一、を、獲、鳥、岸、角、を、必、と、
う、舟、世、尊、の、れ、と、懶、く、い、る、事、函、を、木、地、
白、檀、頭、勝、産、す、ら、ぬ、と、い、ふ、胸、中、へ、こ
み、録、し、於、り、と、い、ふ、と、意、原、を、え、と、し、胸、中、の、心
七、へ、こ、み、と、い、ふ、所、と、樹、木、入、家、を、刻、し、と、し、細、刻
物、と、い、ふ、を、体、と、漆、う、こ、と、き、塗、料、施、し、た、と、
と、七、時、代、の、凡、代、の、乃、の、塗、料、施、し、た、と、い
へ、た、大、中、代、の、岸、角、を、え、と、い、ふ、と、味、極、す

べし余一尺餘るを一尺購ふと云ふ

○十月廿二日物部宗子とて京東とてまがし廿三日朝京
却と着たりたや下州を偏み格をなすに三才の保
久保持素の名をて共と書画を展覧す、室日
の者高師山人の枯木と石を添くともこの海屋の
題後あるも高久疎林の由里と山形(絹本大物)
山形の山形即此の白畫力格物梅文(画海
屋書畫画帳おとす何んか文早也中一と就
き無画を格しはとて一と即此の白畫後
と書畫画帳也 書畫画帳を價千二る日と云ふ

久保と格々の活流の内関西の書畫店を賣
るを格うともうある格う格うあるも 関西の格
て書画骨目甚きもの高ききをこめあるとて格不
の福も出づ久保のそめを 関西の昔し行
いんと高き格を格うと格物あるも書畫
を購ひにまき格と格うとまきふしとあり
関東の高き格の年々とて此のやういと久保
の言のこころは関西商人と格のの格も
ある格訓をまきとてとてと書画骨目甚
高の関東と面白と云うと 関東の高のブロー

中一曰秋よりん及まゝも傳成るゝかと思ふ
なり

○十月廿三日の鳥丸下村邸を訪ふ主人と改
筆お休ある終つてよりまゝ印と決しと云
書畫骨子畫の内北家の名おと夢と云ふ七種
古画の内前をいへ漏くして三幅をえり(此七
種を若し京都の書家大里念多徳うゑは
とる志女の事歴々前自の記を載せり)

一 東坡和鳥書 横軸

文云 石庭

大書横軸書横の書き左表の
後款ありて書体極めり氣
格 石のえはれり不毛と云
いふと 徳三流又の由は
あり
鳥居理の未何人ころと云ふ
夢々々 鐘を鳴る事朝の過き
ん けりるるる

一 南唐一清水の書

横軸書 楷體を 行体と云ふ
至心のを 強あると 母凡 勢氣
格 易上と 浸るめらるる 名 陽也

吉徳又白地印と茶の印をとも
用ひ言ふ事なきのこゝも

一 徑山元史行瑞の古版

又前稿と同じく行体は借瀆と
志しとてその至順の年號あり
前あるにそのが華下法稱の下の古版
玩するに是の志徳心又茶の印をとも

同也

下村の家は動心院しめの此本と云ふ印をんとも

此の古版は此本の改竄入の年をなすや

懐のこゝに別と轉に性成とてをぬる

下村の古版の古版をおのゝをぬる

る三説院も此の古版の終る古版の古

版も皆古版の古版の古版の古版の古

版も皆古版の古版の古版の古版の古

版も皆古版の古版の古版の古版の古

版も皆古版の古版の古版の古版の古

思ひなき

下村の古版の古版の古版の古版の古

元版の大本在子(二書)跡寄是所必代の書入ある
 一の跡と云ふは是の家の成る事なりと云
 或は紛れんことを云ふを弱りゆふ
 〇此年古花の古書畫の七切とあると云ふ二枚
 お層のと云ふは意の致味をあらしむる
 ことと云ふは一更と云ふことを心づけ
 両枚古書畫の七切とあるは二十枚を
 を獲らんと乃ち又半双を心し、目録略左
 の如し、作文山執者、古狩野村と云ふ。延徳丸
 野切丸、光の星は宛あり、松浦使臣古海う補

形名紙二、繪紙丹二、筆地社元画、團扇、長福
 の興者なり、法隆寺の印あり、元禄の代
 美人画、林路山勢画、藤の結衣の襦、古
 畫、猿太夫、伏見市上店、筆のり、筆地松舟
 栢扇画、葵瓶職人、十品二枚、後、高島氏
 宸筆と名紙、今川の後、高島、古畫、團扇
 團扇、古花切丸、龍山葵瓶、草花画、古文
 古四種書、古画、外二枚(十月、林書、筆切丸)
 切丸の文ありす

〇此書機の遺し書目を抱き、心より、抄り、余り

古書之主なりし北城の報の目一語を以て
にせり即ち流すに如く北城の報を以て
と流すの如きを以て内田三浦流しとせん
なる事一なる録ゆり石版にりしが版に列す
内田三浦流しとせん今之先流しとせん
北城の報に如く酒次大夫時代の新書を以
て版に傳へし事大いに其ていふ事なり
きの語を以てし得る事ありとせん其の事
し語を以てし得る事ありとせん其の事
語に苦むる事ありとせん其の事ありとせん

日之記とて朝野群載とてその名を以て行
々の下抄を出す也其の抄を以て其の事ありとせん
ん事ありとせん其の事ありとせん其の事ありとせん
七事ありとせん其の事ありとせん其の事ありとせん
まう約集とて其の事ありとせん其の事ありとせん
ん事ありとせん其の事ありとせん其の事ありとせん
四事ありとせん其の事ありとせん其の事ありとせん
語や流しとせん其の事ありとせん其の事ありとせん
其の事ありとせん其の事ありとせん其の事ありとせん
其の事ありとせん其の事ありとせん其の事ありとせん
其の事ありとせん其の事ありとせん其の事ありとせん

能ハス也北本數十冊の二書を出し示ス
 同くこれ等祖母ゆゑ子の名に歌集并
 其年譜本也と云んは必し何れも又^後冊のあ
 る事相違多し之を以て今其家と引
 揚ふに如何なるか教傳せしむる後圓井
 家の年々論し之を述はるに略する
 也と云書に^{圓井}の^花書^印あり(後村の書
 印)各書と題抄するんや祖母自筆の歌
 集二書(北本の題)十二三才の只書也
 日守祖母の命に^題書^後也認めたる事

也)可也和良お舟字の歌集者二書外二三
 本ありと云ふ心もあはれ也北本に法ありし年
 持ち抄すすくく^一言^二之^三為^四祖^五母^六の^七歌^八集
 ハの^一う^二ら^三ん^四と^五ま^六く^七ハ^八衣^九也^十と^{十一}ま^{十二}く^{十三}ハ^{十四}衣^{十五}也^{十六}と^{十七}ま^{十八}く^{十九}ハ^{二十}衣^{二十一}也^{二十二}と^{二十三}ま^{二十四}く^{二十五}ハ^{二十六}衣^{二十七}也^{二十八}と^{二十九}ま^{三十}く^{三十一}ハ^{三十二}衣^{三十三}也^{三十四}と^{三十五}ま^{三十六}く^{三十七}ハ^{三十八}衣^{三十九}也^{四十}と^{四十一}ま^{四十二}く^{四十三}ハ^{四十四}衣^{四十五}也^{四十六}と^{四十七}ま^{四十八}く^{四十九}ハ^{五十}衣^{五十一}也^{五十二}と^{五十三}ま^{五十四}く^{五十五}ハ^{五十六}衣^{五十七}也^{五十八}と^{五十九}ま^{六十}く^{六十一}ハ^{六十二}衣^{六十三}也^{六十四}と^{六十五}ま^{六十六}く^{六十七}ハ^{六十八}衣^{六十九}也^{七十}と^{七十一}ま^{七十二}く^{七十三}ハ^{七十四}衣^{七十五}也^{七十六}と^{七十七}ま^{七十八}く^{七十九}ハ^{八十}衣^{八十一}也^{八十二}と^{八十三}ま^{八十四}く^{八十五}ハ^{八十六}衣^{八十七}也^{八十八}と^{八十九}ま^{九十}く^{九十一}ハ^{九十二}衣^{九十三}也^{九十四}と^{九十五}ま^{九十六}く^{九十七}ハ^{九十八}衣^{九十九}也^{一百}と^{一百一}ま^{一百二}く^{一百三}ハ^{一百四}衣^{一百五}也^{一百六}と^{一百七}ま^{一百八}く^{一百九}ハ^{一百十}衣^{一百十一}也^{一百十二}と^{一百十三}ま^{一百十四}く^{一百十五}ハ^{一百十六}衣^{一百十七}也^{一百十八}と^{一百十九}ま^{一百二十}く^{一百二十一}ハ^{一百二十二}衣^{一百二十三}也^{一百二十四}と^{一百二十五}ま^{一百二十六}く^{一百二十七}ハ^{一百二十八}衣^{一百二十九}也^{一百三十}と^{一百三十一}ま^{一百三十二}く^{一百三十三}ハ^{一百三十四}衣^{一百三十五}也^{一百三十六}と^{一百三十七}ま^{一百三十八}く^{一百三十九}ハ^{一百四十}衣^{一百四十一}也^{一百四十二}と^{一百四十三}ま^{一百四十四}く^{一百四十五}ハ^{一百四十六}衣^{一百四十七}也^{一百四十八}と^{一百四十九}ま^{一百五十}く^{一百五十一}ハ^{一百五十二}衣^{一百五十三}也^{一百五十四}と^{一百五十五}ま^{一百五十六}く^{一百五十七}ハ^{一百五十八}衣^{一百五十九}也^{一百六十}と^{一百六十一}ま^{一百六十二}く^{一百六十三}ハ^{一百六十四}衣^{一百六十五}也^{一百六十六}と^{一百六十七}ま^{一百六十八}く^{一百六十九}ハ^{一百七十}衣^{一百七十一}也^{一百七十二}と^{一百七十三}ま^{一百七十四}く^{一百七十五}ハ^{一百七十六}衣^{一百七十七}也^{一百七十八}と^{一百七十九}ま^{一百八十}く^{一百八十一}ハ^{一百八十二}衣^{一百八十三}也^{一百八十四}と^{一百八十五}ま^{一百八十六}く^{一百八十七}ハ^{一百八十八}衣^{一百八十九}也^{一百九十}と^{一百九十一}ま^{一百九十二}く^{一百九十三}ハ^{一百九十四}衣^{一百九十五}也^{一百九十六}と^{一百九十七}ま^{一百九十八}く^{一百九十九}ハ^{二百}衣也

物多しぬ新集の甚く其代の事

一旦家出つて後二三年過ぎ今家へ戻つて西条
、福持を以てこころをうつたふに此氏を或は
七進んじけいありたりとてかきとあり西条
地の延由中場をせのしゆる言しと昔を後
あふしゆるを以てこころをうつたふに蘭校の
蘭傳りありて西条に中二のありと云ふ
を寧ろ中一のありとて謂ふる言き守天の間
傳りありて西条に中一のありと云ふ
を以て此地を此の言ひある言傳りて随つて其地
はと腕白時代ひありたりとありのありとて隨

村の児童群と傳へ^傳を考り此こと言ふも
つこころ自命之年とありたりとて言ひ
言ひて是れは是れとて言ひたりとて言ひ
所々つら七流不曲ひありて満村の子弟あり
つ七か教ひたりとありたりとて言ひ
大徳寺手あふ流つたの言ひを大徳寺に
の村言ひたりとありたりとて言ひ
傳へる村の氏父をいふ言ひを
^傳に傳へる言ひを其言ひを其言ひを
ら七と傳へる言ひを其言ひを其言ひを

由くお泊せしことゝん々ありて免ふ
 こと十数名の傍ら打櫓を泊せしことあり
 此自今や他の二三の寄居生を此等の傍ら
 酒飲の餘位をして遣つて飯粒を^堆置く飲
 を盛るるを強むるのが而もく雪あふれよ
 じと^中の待つて^は長らくは^はの^あむ^むあ^むつ
 此物が大勢の雪をかを^はか^す時々の^はお
 じし^うれ^るう^うし^り枕し^う十数人前
 備りつゝ^をく^ぬき^る大工の^と共^に枕
 木を^運び^し来^りて^を固^く縛^り下^りて^をま^き

共同枕の應用し^て^は^はた^たけ^の枕^をく^るを
 了^す金^槌と^持つ^て此^の共^同枕^の一^隅を^叩く
 と^き細^きう^う一^列を^くて^おも^をる^も雨^のの^ぬ
 り^ゆ方^き一^高の^勢を^きて^を免^すし^て狼^狽
 せ^して^は打^出し^ては^なし^てある^もある^もある^も
 の^ゆゆ^ゆえ^しり^の物^の丹^正の^家の^泊り^つて
 そ^のま^には^いひ^ある^先生^の下^りを^ぬく^地を^く
 金^等者^の生^をを^うて^はい^へん^とも^しも^も
 化^け物^のと^るえ^ん一^流終^んは^代り^にく^縮
 香^を齋^らし^まん^とも^まま^の上^飯の^香煙^を

う歴之此のこくと眼前の深さ其の言ふ印の
 の四顧の真味のあらま此をな存するのひあ
 今此をのれらるる者居を余の印するに二つと三つ
 遠河津の輝光の光手う位をたつむ此所
 ありり此をの位いさうのき也年改築せし境
 ゆうに四季の花樹を多く植ふる誰れも村民
 川末のし遊ぶことの出来る様さうとたす即ち
 西本のいさむむあさりだ、此處に成石の硯
 會話の傳あるを此曲書とす人の冊まつ家
 の世話うさうこいふ一年のくも長つたこと

があつた人々龍舟があつたことよく深切に教
 へて貰ふる人があつた自入りも日々こゝに本
 教をよめたとあつた、此を多く電を論しと
 此本をね深くするも態を論して成概
 坊くさんだぞ折のあし雨苗ととと
 寝を種もつらうのすうの胸をな津来し
 しまんと天のまむ眠ることを得無うと
 曉望の遠方のあつたんを前の河
 へ到り顔をかきんをすききあめを
 してすこらるる山をまてと此の川を

と、ういふまゝに地をきき心をよきせん余り感むら
 くのをちも腹つゆとそり教系と終ら院
 心はくくく入るまゝの國のよきと味つてえんは
 いかも味味とちとそと教くはら我中一うま
 くえくはのま何子の絶業と味味汁とくは
 のと鮭卵の味学はかあつは、別くくは院
 けりともうと書つくと味とつちある白菊二三
 株を根ごきくくも指のくくくは先あるを
 らもくくくは年並の京都のくくくは申福植
 せんくくく菊苗のくくくは離の千間のを節くくく不

けり押あめ遊しこをくくくはくくくは又くくくは
 京のちくくく袖し枝くんとくくくはくくくは

○十月三十日

新はくくくは活なすは板に五峰は根
 ちる三浦宗十も来くくくは宗十をを糸糸既
 星命博士の徒をくくくは氏の日余の是は年也酒
 ち余がゆい星命博士のあ人其代のちを以て
 了言を説くくくくは星命博士のちを以て酒
 ちくくくは十才位はち其のちくくくはくくくはあちあち
 ちくくくは分快するくくくはのちくくくはのちくくくはくくくは
 と説くくくはくくくはのちくくくはくくくはくくくはくくくは

生と二流飛に色晴しと人の國文とを又此
古晴くし或るの事たるの親成る嵐の某
一振え先とせしむるに酒問も嵐
の國とあるは某處なるに往く日本四
丈上の條をさしむる先と受けこなく出
まざるし一は流みと冷笑したりとを
るは又他くも其れをさるるに
念との事無言の暇とけす望朝物也的
けさる侍と時とそくする自方(よまを)を
梅の起しとこころあふくはくんとあせ

らるるにこころを散るげのこころを
梅の起しと時とそくする自方(よまを)を
梅の起しとこころあふくはくんとあせ
とふ或人と身体を吹き飛ばさるる
るるも其れはあはれなるにゆくりのこ
あしとせしハナラヌ氣のふさき人ら
余問の先とのこころを長らるるを
史まらるる中史記流吉の道流流らる
るに記あるも其れをたれを散る流流らる
し先とのあはれとせしむるに流流らる
流流らるる中流流らるるに流流らるる

に述べ先ほど言仲の力を較べんとて陸尾に
控へる人と對せばしる初め言仲は論議を
し之がうへに論議をそと傳へるし先ほどあ
らうと言仲の論議をビレレ一駁し或人と云
仲しとてけえ地くさうしをくもせんか
ゆれも傳へてし言仲しと比し先ほどの
言力を確しんぬあ以上をうることと認め得
たり云

○この本初りの下村家もしはるんはるん
あまの初めしはるんあまのいふことと

まをぬ推心に與せしは二三を降るの
あんなことしはるぬをえし改命をえし
えり堆のんはるぬの若くえぬの以家流大
名曰士の進物ゆしはるぬはるぬの元
へはるぬはるぬはるぬの所以七奇をたえし
のあはれおまはるぬはるぬの流るも廣おま
一統をうしとえり

ホ一 近所三流

ホ二 白

ホ三 赤 花巻

才四 秀吉 在布 長相日景

才五 足利義昭 在布 義昭の才也

才六 伊達政宗

才七 淺川新吉 在布

才八 口上 在布

才九 北田信玄 在布

才十 細川昭四 口上

才十一 毛利元長 口上

才十二 茶人 未考

才十三 梅花堂

才十四 羽柴秀勝

才十五 春念堂

才十六 深居如也

才十七 口

才十八 江月如也

才十九 大徳寺信 乳未考

才二十 茶人

才二十一

才二十二 沼蘇眼海和也 大徳寺
二乃三世

才二十三 梅堂前 福也 大徳寺
乃三十九世

其中心に編輯の志の爲めあつた日記

市士川淵ハ奈須玄迪の事蹟を條記して

此人の名を人名録にも載せしむ位に遠く

と入るんを返す者の難免を在るを其の如く

爲極ざるに比すべきも也玄迪と柳村と

したる云々廿六世の故郷を言明と名を返す

とある雜流の篇を返す一公儀と商家と

一挙二の爲の謝意を賜ふこと其の如く

つと著名の名家也柳村と天保十二年二月

六十九才と歿し、其の條記あり多紀元長

と相違なく自ら柳村に退隱して返す方角

元校河一とを歿したるうらまへ多し人子

如くんと記すも其の一事の心を伝へる事

のちを刊行し、吾々の傳記誤と著者校

訂せる印を返す一うらまへ彼れ自身の文

業中一樂身歌と述すも其の命あり校訂

共心をもつことを叙す回々、寶徳古書煙晦

校訂文の如き事しとある、彼れを是則本の捧

心方を得て考訂に共辛し校訂漸く成り刻

乙部中存を献しとてし、市士川淵其の是如く

のすてんころり清きるを去りては
 とまふ甲しきと楯林（此の書は）まか流し（此の書は）
 外（此の書は）（まもるべき）
 榎野くしと敗せんころり之即ち此の別人
 の逆を刺しけりころり其訓書（此の書は）
 たるん外科者のるちまきころりころり也
 杉門左の書中一抱の版とる類任解剖回
 示る
 福田政吉の撰著を此書元干の内春の版と版式
 なる美なるころり也

因明正理門論本

月二巻尾二年孫考刻しころり春の版と
 杉と極めし路也乃て改復を印もたぬ録す

沙門弘唐蒙漸寺衆余造正理論撰矣

貞夜壬午中夏下旬刻功畢

願継應理宗法命 久増春日靈庵（成）ん

遠生有持類慧解 比の共也得龍半卷

大念中三の念衆も引率して岩崎男爵家より
 を抄る其の路をいころり石宋橋山花の末え
 版とる即ち先代の晚年と精ひ又ころり

位深心無古より、昔之難きよりを言轉の如く
あり、何人より多敷^{つひ}唐親のよりを言轉家
松をも混雑を脱し傳う、尤物二十、物種を
ぬき平し、信あり、又よふ、其に一、遊を思ふ
ル、さきより、之を告、成し、いん、と、高、
二、三の物、而、て、竟、い、る、と、あ、る、左、の、高
目の尤、より、二、三、と、揚、

宋物論語集解 五本

いん、の、平、版、論、語、を、い、る、人、の、言、し
る、こ、ろ、の、こ、ろ、を、い、る、と、い、ふ、こ、ろ、の、こ、ろ、

いん、の、平、版、論、語、を、い、る、人、の、言、し
る、こ、ろ、の、こ、ろ、を、い、る、と、い、ふ、こ、ろ、の、こ、ろ、
と、い、ふ、こ、ろ、の、こ、ろ、を、い、る、と、い、ふ、こ、ろ、の、こ、ろ、
敬、求、記、の、如、く、と、い、ふ、こ、ろ、の、こ、ろ、の、こ、ろ、
本、を、い、る、と、い、ふ、こ、ろ、の、こ、ろ、の、こ、ろ、
恐、る、朝、野、を、い、る、と、い、ふ、こ、ろ、の、こ、ろ、
い、ん、の、平、版、論、語、を、い、る、人、の、言、し

礼記

汲、古、閣、の、花、を、い、る、花、印、あり、と
吹、放、と、い、ふ、こ、ろ、の、こ、ろ、の、こ、ろ、の、こ、ろ、

元版と云ふは誤り不_レ至_レ明_レと云_レ元_レ後_レの_レ陽
け_レの_レ陽_レ不_レ至_レと云_レことを記し_レた_レり_レ或_レは元
の_レ年_レ籍_レを_レ考_レへ_レり_レて_レ其_レの_レ元_レ版_レと_レ似
たり_レと云_レふも_レあり_レと云_レふ

酒花一本

汲古閣宋版疑_レ本 一枚四冊を_レ
け_レの_レ物_レ言_レふ_レし_レと云_レふ_レと云_レふ_レと云_レふ_レ元
の_レ物_レ言_レふ_レし_レと云_レふ_レと云_レふ_レと云_レふ_レ元
本_レと云_レふ_レ事_レ尾_レに_レ錢_レ錫_レを_レ置_レけ_レり_レと云_レふ_レ
の_レ疑_レ也_レと_レ誤_レ也

宋版大字本春秋

ハ州本より版式異也

北宋刊 冊府元龜 三十三本

張子和送書

金代_レの_レ書_レ多_レ所_レ也_レ故_レに_レ皇_レ刊_レと_レ云_レふ_レ也_レ
此_レの_レ版_レ式_レ宋_レの_レ物_レと_レ異_レなり_レ元_レの_レ物_レと_レ異_レなり_レ
たる_レ日_レ西_レ日_レ不_レの_レ物_レと_レ異_レなり_レと云_レふ_レ也_レ
其_レの_レ版_レ式_レを_レ考_レへ_レり_レて_レ其_レの_レ物_レと_レ異_レなり_レと云_レふ_レ
也_レと云_レふ_レ事_レ也_レと云_レふ_レ也_レと云_レふ_レ也_レと云_レふ_レ也_レ

入り

漢隸字源

宋版影抄

嘉祐年右陸師道抄し文衡山
物々字を細書す師道之文衡山
の一人也

宋蔡汝本漢書

文字の兼に成せ、美を捨む

陸立公本

細書の宋本を細書のの確るよ
と云ふなり

宋版の故本抄を印を二枚一と厚紙を自
ら作ることを細書といふ。南人など世に
はの本印の物、今も寺に記を記す。是
一説の如く、宋に教条を余りて七抄、其
一と云ふ。是の三を述る。凡そ海内、其
と其平を抄く。高橋のてい、其んど
る。其の二、海に、其の式の本、其の

公を定めしむることきも一書業也何れを余
の指をを記しり比又國書館の法を又り中
とてめしむるに會長を門閥とする弊ありと
めん為進し何れ也(國書館に軍書會長を
迎ふに下しむる也)の上地)

○この書業骨董屋にありて中
に幾れ二書をありしり又國書館に
は集二外一と得るるに書とて四り印的
の年ありし書屋に十二書の書とありし書
如本朝の法を記しし書ありしり也

りなすしむるの書世の法の外に一書
の書ありし書屋に十二書の書とありし書
いしり書とて一書とて一書とて一書と
書ありし書屋に十二書の書とありし書
也この書とて一書とて一書とて一書と
元七年六月十号の書ありし書とて一書
する所ありし書とて一書とて一書と
中書ありし書とて一書とて一書と
日ありし書とて一書とて一書と
栗田氏の書也(十一日ありし書とて一書と)

明治三十八年四月

日本侯爵伊藤博文撰
子爵杉重華書

大工 小林誠義
施主 十方檀那

主意書

清國蘇州寒山寺ハ往昔寒山拾得垂迹ノ靈場ニシテ唐ノ張繼楓橋夜泊ノ詩世界ニ誼傳ス長髮賊ノ亂ニ係リ伽藍燒失頗ル荒廢ヲ極ム曾テ彼ノ地ニ遊ヒ端ナク寒山寺住職ノ奇縁ヲ得先住松林孝純ト再建復舊ノ事ヲ謀ルニ先タチ彼ノ有名ナル夜半鐘ノ我邦ニ渡來シ形跡ナキヲ惜ミ一端歸國シ搜索スルコト、ナリス故伊藤公ニ我邦檀中總代ノ任ヲ託シ公ノ承諾ヲ得ル時ニ篆刻ノ用アリ滄浪閣ニ泊ス詩アリ公ニ呈ス曰ク「曉天離野寺。矯首聽林鐘。古鏡當心照。寒山對雪峰。公即席和韻アリ曰ク「寒山存舊跡。有日復洪鐘。問法天臺上。應攀第一峰。」之レ寒山寺梵鐘再建ノ發端ナリ其後公ノ名義ヲ以テ多年内外ニ探ルモ出テス而シテ三十八年ノ春ニ至リ彼ノ古鐘ハ我邦ニ於テ消滅セシメタルノ事實ヲ發見シ再ビ得ル能ハザルノ證明ヲ得タリ因テ新タニ鑄造シ以テ彼地ニ懸クルコト、決ス即チ公ニ鐘銘ヲ乞テ成ル爾來形式其他考案ニ年月ヲ空費ス終ニ昨年公ノ異郷ニ薨スルコト、ナリ今年十月ハ公ノ一周忌ニ相當ス鐘ヲ鑄テ公ノ精靈ヲ供養シ併セテ公ノ遺命ヲ全フセンコトヲ慮カリ茲ニ梵鐘再建ノ大業ヲ發願ス十方ノ檀那余カ微力ヲ助ケ此大事ヲ成効セシメ給ハンコトヲ懇請ス

明治庚戌春三月

清國寒山寺住職

願主 山田寒山

梵鐘分身分配規定

- 一甲號 (竪七寸余) 金拾五圓
- 一乙號 (竪五寸余) 金拾圓
- 一丙號 (竪三寸余) 金五圓

一大梵鐘ハ圖面三尺三寸ノモノ二個ヲ鑄造シ一個ハ清國寒山寺ニ送り一個ハ日本寒山寺建立ノ上懸ルモノトス

一分身ハ大梵鐘ト同様貴重ナル合金法ニ據リ鑄造スルモノナリ

一分身ハ三千個限リ世界ニ留メ永ク伊藤公ノ鐘銘ヲ讀誦記念セシムルモノトス

一分身申込ハ前金又ハ代金引換小包郵便ニヨルコト

但前金ナレバ送費無料引換小包ナレバ送費御支辨ノコト

一分身發送ハ申込順次ニヨル

一明治四十四年春東京芝公園増上寺ニ於テ各宗管長ノ撞キ初メ及百僧供養ノ大法會ヲ修行シ伊藤公ノ追福ヲ爲ス期日決定ノ上御加入諸君へ特別招待狀ヲ發スヘキニ付遠近共隨意御參拜アランコトヲ請フ

一芳名ハ清國蘇州寒山寺本山ニ永世保存スヘキ臺帳へ記録ノ都合有之ニ付府縣市郡町村番地ハ勿論姓名雅號共明瞭ニ御記入アランコトヲ請フ

あるしうのうを流るる其氣味さくまぬし
あつてま特々歎けを聲のしゆさくし
の大徳寺傳四十帖表の同額と次ける所の
墨蹟目をまらうさるる一冊と書きくく法表
宗王三宗王の果筆紙るんをまらうの爲の
墨蹟をわのくく一冊果筆の紙筆と傳大徳
神河傳と細考しきると決む大徳傳のま大
徳寺乃四十二代元和公年八月日乃遷りて
名を丹峯と印とくく大徳傳の傳紙と
七巻長三年五月の日は物成るを大徳

田光祿の勅額も別りくく四十七帖
傳紙と同額をくくをくくすんは皆ま大徳
傳の伝紙も次額するしあるることてあは
るく一冊傳紙大徳印を指しけく或るの
代の大徳寺傳の墨蹟をえんくく屋巻の
よの也印果筆の家政をわくく是の(十一)月
也

○或る人新羅地古印を寫し
一奉り示るる書を指すは
新しきと傳紙を稀也



○十一月十一日 馮耕三自物志の筆一本を獲たり
西端に大牛を畫ししる彫物ありし細字の刻の
あり

故園在印路後 馮耕三自物志 淚不乾馬上
お春を紙書 憑衣侍 淡 報 平安

甲戌七月馮耕三自卷

馮耕三の註年のありき 木村徳を刻の長谷の
法をめぐるは人なり 木村の筆の形 後えらし
ありしと馮自物志のありしと ことごとし 伝
と花とあり

此の井邊に所を伝ふる 木村徳を刻の長谷の
版一枚を獲たり 湖波を 橋上美人の圓也 亦
刻と書し 橋をとりて 是なり 此の徳を刻の
十の年 前 漢名あり 松江 美術文 亦あり 亦
徳徳を刻し ことごとし 其のさし 伝ふる 又
は 浮世傳の一 ところし 木村徳を刻し 此世 版刻の
あり 此の人の 遺刻を 傳り あり 亦あり 亦あり
要する あり あり

井邊に 伝ふる 傳り 刻し 傳り 傳り 傳り
の人 物 傳 版 二 三 枚 あり あり 七 枚 あり あり

刻法をえんじゆのものと著しく面目を異
うせうを刻る者つとを所習うツツカケ紙
を刻深くと紙のこころを淺く刀をぬつと
淺くぬつとものふか^く比較して異向と
あまうより一息さう

又林の流しは淺井忠(形人)と書ふらう
淺井傳としか書ゆと書ふらう一の形ゆ
也の書(後)らうの伝とらうなりと一と画
のちもく出来たるふのふだ女めはあつて
つと用う紙するうねらぬ(選)選とぬ

くまのうらんと一説さう

林方しとまののち後十二三と一とをにねめ
らうとあそくう今う方ととあそくをせし文
換するゆ来也此書と山此林改非としこんい
と心の保うと山ゆら改記の補筆と紙したる
つ八葉系と陰家花のうし一葉陰のあそ
をあ款えと午の間し家秘禁出つと考しあ
りも依りし山ゆの抄考に似るものと書守の古
とてくを換し紙と紙とるものと思ふも
井と漢系と字家とるらうなり

の世をくを備ひ之れをいふ店ゆゑ完結するも
防制するに終るに殺さんといふは仕まつるに三
日計りしを結ぶるの事と改む久しとを先け急
に方おしとておを呼ぶやうに聞かすといふ
いふうけさるおを速く出すからしむる
入書用を急しむる次第をしかり聞かす十一
二第の果をさるる結ぶる店を開つるゆゑ
之秩父×ーセレ二三とを刺するにさるる物
況、之れゆゑの一日のこともさるる西京店を
くおとちりしるおをえりさるるをさるるを出し

て真逆スコンドものさるるまじと思ひし
似たりさるる愛のゆゑさるるさるるさるる
さるるを修むるまじのさるるの感傷を叙し
起し、いふと燃しぬのとおはししと美人と
夢中さるるさるるさるるさるるさるる
状況とさるる流るる大丸の存をさるるさるる
誰れとえりつける事とさるるさるるさるる
い田前一年飽ち苦心するさるるさるるし
とさるる一變するさるるさるるのゆゑとさるる大
丸は服店を流るるさるるさるるさるるさるる

一之木沢花を二之木沢花より天保11日の
 建業と受りて廿二三階を造りて其がうら
 ち動万友を入るる花の今をがうドをす尺
 のきん七尺を造りて建業我の巨大
 を造りて花の永あを告げて其が人の心
 を村がし七階の情状の念を造りてし
 日十一月十日の ち大塚の路の七五三の内
 室あを造りて其を杉浦佐五郎其他親族も
 商人あを造りて其を杉浦のより木と
 棧とて六階の造りて其の今の人と

近し杉浦の杉浦佐五郎と造りてし
 陣を今を造りて其の杉浦佐五郎と造りてし
 伯田の杉浦佐五郎と造りてし
 の出来はを造りて其の杉浦佐五郎と造りてし
 きふあを今を造りて其の杉浦佐五郎と造りてし
 情を造りて其の杉浦佐五郎と造りてし
 杉浦佐五郎と造りて其の杉浦佐五郎と造りてし
 四の杉浦佐五郎と造りて其の杉浦佐五郎と造りてし
 を造りて其の杉浦佐五郎と造りてし
 貨を造りて其の杉浦佐五郎と造りてし

邦の形を以て早稲の大なるものと見
 何んゆも口も入るあるの速はなるも
 うけはる早稲のこれの出入りある
 心のあつても見しぬ聞ひれすと
 全のともあつてと急と辨りて
 正等早稲のちるちるの想う
 とは早稲の念ふもあつて
 するべきものと自らうらまを
 物と九つぐさせれすもあつて
 赤國のうらまを七、八の
 後

こそあつて自合もえ境に入つた
 のゆひ出にゆねと早稲の
 とまひ出しと、おとまひ其の
 とまひとまひ、三千の
 七段がらむを指さす
 うとまひ、早稲の
 自合のまひとまひの
 赤國のまひとまひの
 リもまひ、早稲の
 リもまひとまひの

皇本此比止凡一集

八十四西田集卷八

口口

とありし海中の梅をハ十三丈の的也之所志歟
とせらば梅の志をいふことと思ふ、此の梅
十枚をいふこと梅七枚とせしむるの外二
枚あり又あると云ふを梅の年次を
異りし一年の梅を異刻したる印数類
を指す、是れ一幅の画は梅次吉きんく
の画、梅のふたふたの枝交あり其画
を意しめ、古き梅のなるものといふ一印と

自刻とて之を括弧に入れし、此人のゐるに
付る作の上乗と認めざるべき歟、今も及
古も其画をたゞ梅の及梅をさうする(四十
三年十一月十九日京都、梅のなるもの、梅の
なり)

十一月廿二日 大山下村家も梅の年次を
、寄給せんとし、梅のなるもの梅のなるもの
梅のなるもの梅のなるもの梅のなるもの
と及梅のなるものを梅のなるもの梅のなるもの
山田の梅黄と梅のなるもの梅のなるもの梅のなるもの

ううと思惟し誠之を之を以て之を購ひし
ある近衛三井の二家と下村のふたつを以て之を
見てもううううううううううううううううう
ふたつを以て之を以て早稲のふたつを以て之を
漢義を出版せんといふのうううううううううう
是とあるてううううううううううううううう
漢義出版のううううううううううううううう
しんううううううううううううううううう
てけううううううううううううううううう
大成は先代書うううううううううううううう

什之ん七等うううううううううううううう

十一月廿一日 晴うううううううううううう
拾五のううううううううううううううううう
漢出のううううううううううううううううう
所集のううううううううううううううううう
在波の遺名と云ふ其集卷之漢の友友友一の
み入ううううううううううううううううう
たるたの無近のうううううううううううう
のあううううううううううううううううう
枕のううううううううううううううううう

傳の心とて

下村家の骨董屋を海列と親る昔也
四万に二回に於て一回し能の正教を
出すべしとて、坊主も術師も印
障の如く、母胎を接するの意をも
海列に傳へしあり、無家の珠
付しとて、海列に出し、是れのことあり
おれり、是れは、坊一の事、人五人と
て、視世縁の寺、海列の事、人五人と
坊主の、是れは、坊一の事、人五人と

きも、是れは、坊一の事、人五人と

山に、是れは、坊一の事、人五人と

す、是れは、坊一の事、人五人と

文人の、是れは、坊一の事、人五人と

お、是れは、坊一の事、人五人と

き、是れは、坊一の事、人五人と

際、是れは、坊一の事、人五人と

一、是れは、坊一の事、人五人と

室ありん、之れを抄りて、
おまうるゑ、又、其、他、来、り、ん、
之、の、由、守、り、て、
之、を、得、り、

大丸の古書を、
す、之、入、物、
心、所、
許、も、ま、く、
重、刻、す、と、
自、十、年、

ら、ま、此、形、を、
書、美、有、部、
字、を、要、す、と、

又、云、く、余、の、
九、月、各、本、を、
揃、ひ、居、り、
合、一、の、
字、形、之、れ、を、
以、し、以、
る、以、居、

寫本では、
禮義類典 二百餘卷
神書鈔 三卷
平家、平治、保元各物語、
東大寺要録 十卷

去佐日記 二卷
これは加藤美樹注、全部上田秋成の自寫である。その末尾には左の如くある。
「静舎字萬伎のし安永七年水無月十日といふ日都三條大宮のやせりにてむなしくならせたまひぬ、此の年享和元年といふまで凡そ二めぐりにや成ぬらん」とおぼしむるまゝ、この日記の解をなんぞう出でたむけさばかりに書清めてたいたつるくらき眼を又はたけつ、ものせしかば心さへやみ路たざるやうにてなん文字の形はさらにもいはじも心をやあやまりつらんあなかしこ」
土佐日記解合抄 二卷
これも加藤字萬伎の自筆本らしい。
泮水和尚集 三卷
これは下河邊長流の撰であるが自筆本らしい。
令義解 十卷
これには「鷹司成府御圖書印」と捺してある。其の奥書には
「近年勅近臣、先年新寫矣當春爲十冊有御前得拜命于公格、通善、哲長等朝臣令撰寫了。嘉永四年中夏、關白花押」

とある、
崎門派諸家講義筆記。
綱齋、栗齋、賦齋先生等。
等がある。

住吉文庫と天満文庫

寒溪生
さて一方住吉の方は如何であるかといふに今は維新の頃に散逸したので少くはないが、何しろ攝津の一宮で太古から人口に膾炙して居る神社であるから當然の事ではあるが、鬼に角結構な事である。文庫設立の起源を調査して見たのによきは分らないが、大阪書籍商高橋種彦の中に「住吉天満兩社御文庫起因及び繼續の事」といふのがあつて、それには左の如くある。
住吉御文庫の儀は享保八年書林仲問の内にて發企致銘々奉納之書籍貯藏可致ため一社へ申立於御境内二間三間の寶藏を建設致し、(此書料高附は略して載せず)尤、仲問一同申合せ年々初夏之頃、御拂ひと年番を立帳を敷、社の上右修行致自今例々無斷相動申し、勿論一社之寶庫なれども仲問中建宮致し故

永無引受にて修復に無意損毀無之様速に縮保いたし奉納の書目は和書、神書、儒書、口書等に不限凡仲問に取致し書物は先一部づつ、神納致し堅約あり第一は神徳を奉仰ため且は書物焼失及絶毀等有之は節は右奉納の書物を更しに拜借取下し再板可致節之備本なれば新に印刷致す時は活板造も無取別必一本を可被納申口は條無遺失相傳相續可致し事

但最初建立之節其趣意書並寄附之書目並三部同業名別人之列名等一書に刻成し一般通行致し事其文に云住吉大神宮奉納御文庫建立の圖攝州住吉於御神社御境内書籍奉納の御文庫建立之御願此度相叶二間に三間の御寶藏建立仕、御信仰之方金銀不限多少御加入可被成、則御文庫顯所圖如斯(圖入)右建立之願に御加はりの方は姓名を書留り御寶藏に永く納置申し

二書籍御奉納被成、何方は何時にても御取次方へ御願可被成、
一御文庫に奉納在之御書籍拜見被成度方々は御取次へ、御願、御早速相

成申儀に、已上、
住吉御文庫講中、敬白
享保八癸卯九月吉日
取次 神奴 藏人
願主 肝煎 大阪 寺田與右衛門
京都 杉生五郎左衛門
同以下五人
江戸 小川彦九郎
同以下七人
右御寶藏之書籍儘成申合を以講中之内より毎年相改、永々紛失無之様、任儀相違無御座、以上、卯の九月吉日、これに依つて一般概念は知られる、又左の如き文書も残つてある。
一札之事
一當社於御地手前取次を以て御文庫一宇右建立有之成就、任に付爲修葺料、銀子一貫五百目致高附、則此銀を以田地調、置永く無滞様に可致事
一御文庫に今度奉納之書籍帳面之通相改、相違無之事
一已後書籍奉納之仁有之は外題帳面に寫、尤、其書籍納置無紛失様に可致事
一御文庫之書籍毎年土用に講中御出立合可致事
一御文庫に奉納有之は書籍望申仁有之は何時にても拜見致させ可申、尤、根に訛所へ遣し、儀一切不致事
右之通相違無之は然上は御文庫之儀に

付講中は遺亂可致、爲後日、仍如件、
享保十二丁未九月二日 執次 神奴 伊豫守 藏人
大津屋與右衛門殿 同 藏人
以下云々
右本證文、秋田屋市兵衛に有之、
次に同文庫が安政四年の夏大風で破損したので左の如き勸進帳を廻した事が次の文書でわかる。かういふ時は常に文庫講で今も尚引受けて居るのである。
住吉御文庫破損勸進帳
一住吉御文庫當夏已來強風之節、右御文庫家根廻り大に破損いたし、並に別紙寄進之儀、船松氏を委細取に付、則當秋遊干集會之節、御一統へ其旨及御風聽置に付、當番行司方右破損の修葺見繕ひ夫々引合置、何卒御苦勞御出精御助勢御寄進被成下、様願上、已上
安政四巳年十二月 巳年行司
秋田屋市兵衛 敦賀屋九兵衛 墨屋其右衛門 敦賀屋東七

國の和歌者流、儒雅文章の諸先生風流好古の君子に至るまで和漢の書籍夫々御寄附有之、は處年久敷及中絶、享保年間以來京攝書林中相謀り奉納の書籍時々有之、いへども僅に書肆の輩而已にて、曾て昔年の十が一に充たず故に、伏願は諸國御信仰の御方へ往古の通り書籍の新古多少にか、はらず勸進申度、い何卒御寄附可成下、様、偏希所、尤、例年八月四日於御前、爲願、主安全、奉納、御願、並、御願、書、蟲于致し、間賑々敷御參詣可被下、
神庫御奉納書籍之義は我々共儘成申合を以て永世紛失無之様毎年相改、以、開、吳々々御寄附被下、様、奉、希、以、上
大阪書林 世話方 御文庫行司
これは印刷されて廻されたものと見えて其の印刷物が残つて居る。さて珍本はなんものか、寫本では、
○八雲抄 六卷
これには「永正四年一月云々、定信花押」
○月かけ 六卷
これは繪巻體の彩色畫入のもので豊前國飛騨の庄には、御前、月かけ御前といふ姉妹があつた、その物語である。

國書刊行會

地しぬを拗うても出處をうらうう物も自今
 とあまのをうけしやうもあまのを出處せざること
 あらゆる物なすをたせ出處をぬと此を北
 こぬしをさあまのちをさえんうも毎朝
 子を運動の折をためしや北をのさむにまじり
 清操を祝はん北をの書は操をよきとき
 を自今も物くうも夫人に清操をよきとい
 書にこむる先づける他の長短もあまの
 ちをさあまの八中りのことききかたはあまの
 ちをさあまの物なすに北をの放後まきと

彼らうも子中を備ふん信の結はても
 べのきぬくもま夫人の聽候を人改に
 のつむや赤痛のて印此の命人の死候に候
 ちをさあまのちをさあまのちをさあまの
 リ目まのちをさあまのちをさあまの
 夫人と個殺し記すのめり入迷をせ成
 信人のあまのめりあまのちをさあまの
 こころ信夫人のちをさあまのちをさあまの
 うちをさあまのちをさあまのちをさあまの
 ちをさあまのちをさあまのちをさあまの

其志を巧くしそのうし其のあつたは先くさす
再生の恩を神の御心とて謝する事とて謝せん
らくといふをばあつたの心とて人の誤解をせ
し父母をばあつたをばあつたと思ふ事とて
あつたをばあつたと推測する事とて自ら
心部とて謝せんといふは推察する事とて
うむ一筋をばあつたをばあつたといふ事
前
此の事柄の成程に依りては縁りて果
夫人又終る事ありてこの成程に依りては
うむ一筋をばあつたをばあつたといふ事
後

人々おほく加へていふ事ありては
ともなひなき事ありては人の成程に依りては
世に始りては海潮の如くは潮をばあつたをばあつたといふ事
ある事ありては人の成程に依りては
出づる事ありては人の成程に依りては
此の事柄に依りては人の成程に依りては
七尾とていふ事ありては人の成程に依りては
とていふ事ありては人の成程に依りては
此夫人をばあつたをばあつたといふ事ありては
とていふ事ありては人の成程に依りては

吉 ぬり用 遺恨を 固守するも 上り 打海
 云し 唯打前ら 瑞札 竹馬を 配入 決定
 せし 遺恨の おも 志 あり せ ぬ 未 四
 を 然し 遺恨の おも 志 あり せ ぬ 未 四
 や 必 收入 せし ぬ 未 四
 日 大丸 才一 回 未 四 結果 十八 万 円 二 上
 才 二 回 の おも 志 あり せ ぬ 未 四
 ぬ ぬ と ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
 ぬ ぬ と ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
 と ぬ ぬ 一 才 の おも 志 あり せ ぬ 未 四

ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
 ぬ ぬ と ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
 の 二 三 子 用 と ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
 二 三 子 用 と ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

●大丸珍襲の入札

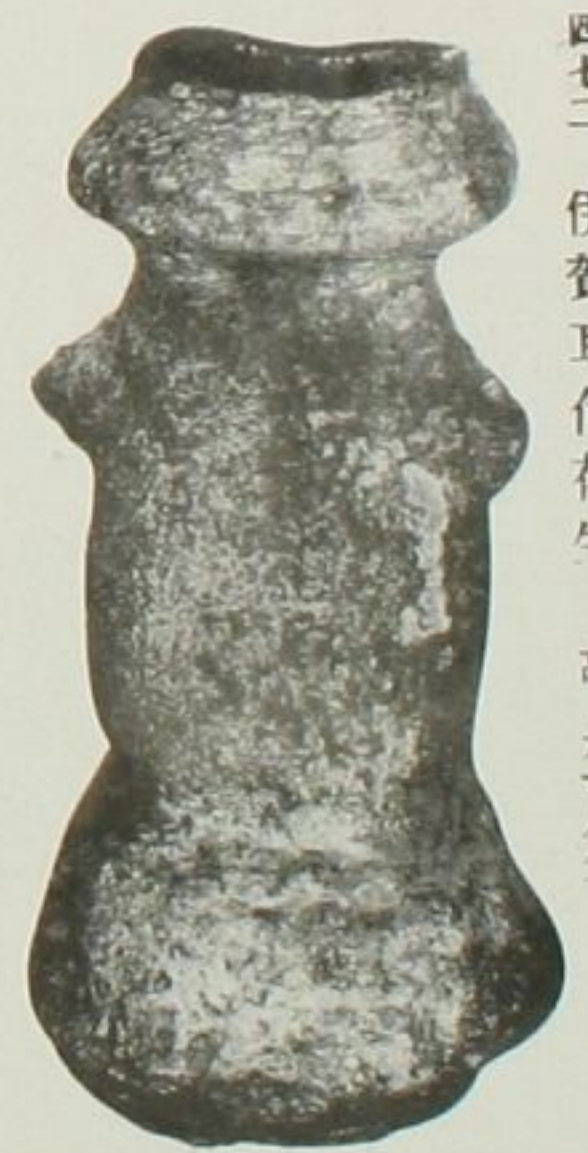
願る 盛況を 極む
 京都下村大丸の書畫骨董入札は豫期の如く二十五日正午より入札を始め午後七時半より開札を行ひしが當日は片岡整理委員長を始め同家の人々も列席し京都市中の道具屋を初め阪神其他の店主夫れく事務所をかまへ湧くが如き景況にて高價品の落札毎に拍手の聲盛に起りて賑々しき光景を呈したるが重なる落札品左の如し尙ほ當日賣却品中の白眉と稱せられた

祝世祿眞蹟幅は或新開には四萬五千圓以上と我國に於て未曾有の評價されたるのみならず當日に至りては八萬圓以上の入札者ありなご噂されたるに拘らず實際は一萬六千八百圓にて今定に落札し二番札は一萬六千二百圓の土橋なりし次で南堂了菴墨蹟が一萬一千圓にて林の手に落ちたり

靈華 高峰 師像 百拙 畫 四百八十九圓にて山中
 ▲陳 龍虎 大福 雙輪 二千三百圓にて林新助
 ▲野 龍虎 大福 雙輪 二千三百圓にて今井
 ▲日 親 龍虎 大福 雙輪 二千三百圓にて高野
 ▲南 龍虎 大福 雙輪 二千三百圓にて土橋
 ▲定 龍虎 大福 雙輪 二千三百圓にて土橋
 ▲相 龍虎 大福 雙輪 二千三百圓にて土橋
 ▲中 龍虎 大福 雙輪 二千三百圓にて土橋
 ▲白 龍虎 大福 雙輪 二千三百圓にて土橋
 ▲入 龍虎 大福 雙輪 二千三百圓にて土橋
 ▲雙 龍虎 大福 雙輪 二千三百圓にて土橋
 ▲千 龍虎 大福 雙輪 二千三百圓にて土橋
 ▲百 龍虎 大福 雙輪 二千三百圓にて土橋
 ▲八 龍虎 大福 雙輪 二千三百圓にて土橋
 ▲十 龍虎 大福 雙輪 二千三百圓にて土橋
 ▲四 龍虎 大福 雙輪 二千三百圓にて土橋

四百八十圓にて土橋へ古書石巻扇面被屏風千
 四百圓にて園松へ山金地藤菊上屏風一雙
 三千三十圓にて中村へ光琳金地四季松屏風一
 雙六千三百九十圓にて中村へ峰崎松下關虎屏
 風一雙(鑑査状)四千二百圓にて土橋へ重雲
 岩川書畫押繪屏風一雙二千七百圓にて今定へ
 下村家傳來五十雙の内金地並松屏風三雙二千六
 百三十九圓にて土橋へ青雲獅子大香爐七百六
 十一圓にて中村へ唐物螺鈿瀨仙長角大平
 車三千三百圓にて今定へ唐物青貝書檯七百五
 十八圓にて桑原へ唐刀木夕顔時輪十種香具
 八百四十圓にて園松へ雪意圖橫物一千二百五
 十圓にて林新兵衛に明悅竹葉館(鑑査状)千
 五百五十圓にて林へ光殿司羅漢千三百二十一圓
 にて土橋へ松花堂岩一千三百圓にて林へ
 董其昌書三行千四百五十圓にて林分家へ黒村
 寒山樵夫遊覽五千八百八十圓にて堀本へ同春
 飲山水双幅千五百五十五圓にて今井へ應舉
 邊松三千三百二十八圓にて山中へ吳春
 (鑑査状)千六百圓にて林へ尙信金地松竹梅
 蘇馬屏風一雙三千六百八十圓にて高田へ下村
 家傳來五十雙の内金地並松屏風三雙千八百八
 十圓にて北岡へ同三雙千六百三十圓にて今定へ
 ▲唐雲獅子三千三百八十八圓にて林へ寛齋
 ▲蓬萊山中北極星迎南極星三千三百八十圓にて高
 田へ定家蜀芝和歌集四千四百圓にて土橋へ
 尚第二回は來月二、三、四の三日間京都
 美術俱樂部に於て下見をなし同五日入札
 の客なるが札元は前回同様林新助、土
 橋嘉兵衛、林新兵衛の三氏にて重なる品
 目左の如く總計三百二十三點にして前回
 にも増して見事なるもの少からずといふ

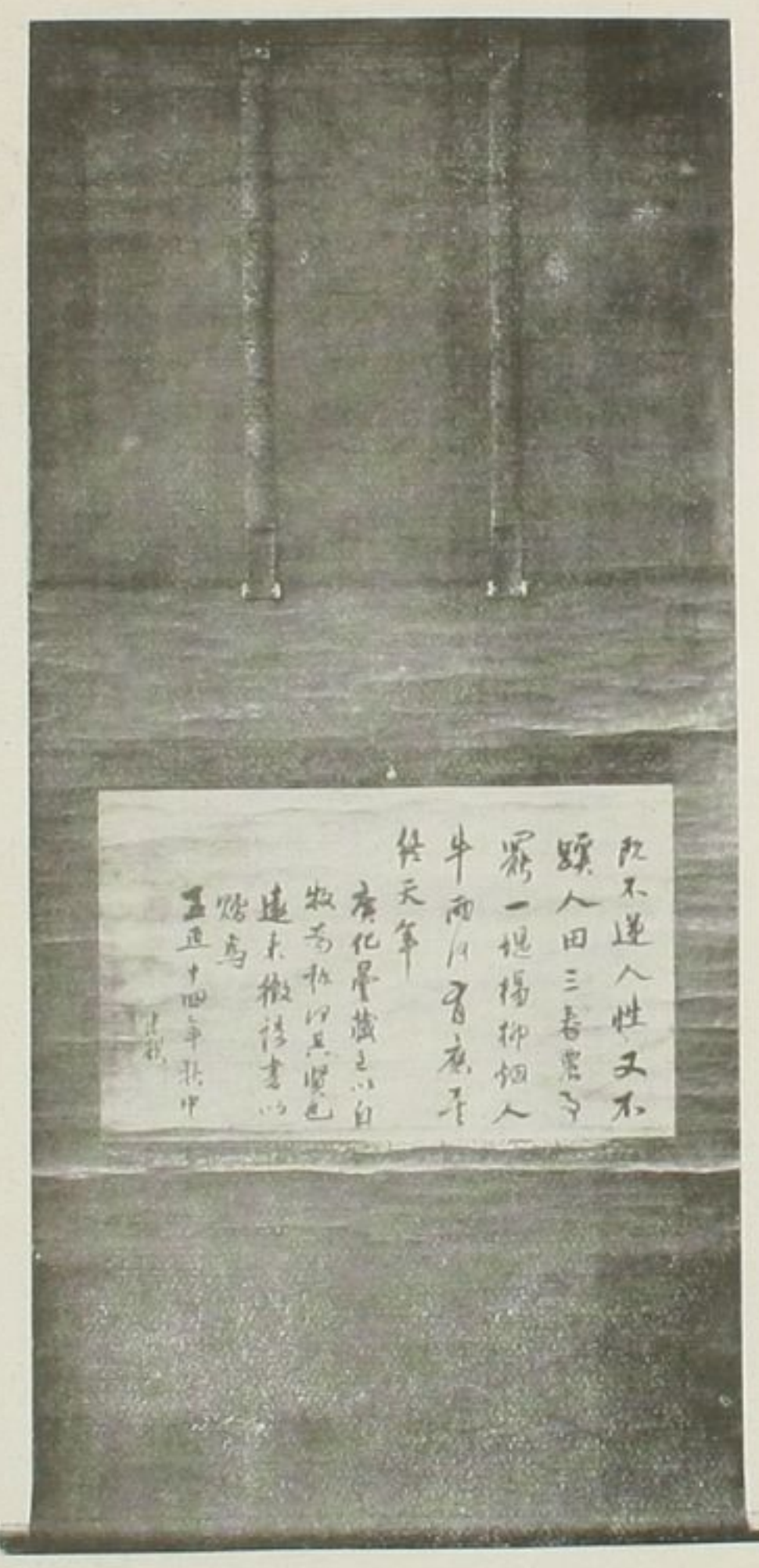
文覺上人文▲光殿司運庵(鑑査状を添へ)▲文
 依渡舟山水自畫(家寶の)鑑査状付き▲文
 明大種物▲無柯農夫山水▲大雅園亭橫物▲陽
 大和遊仙詞▲藤花狗子▲山樂二十四孝屏風
 一雙(鑑査状を添へ)▲深淵四季山水屏風一雙
 同▲岸崎金地華輪孔雀の屏風一雙同▲二條
 爲忠繪百三十番歌合御作(家寶の)▲或技山壁
 蹟卷▲李龍明十六羅漢卷物▲平目梨子地櫻川山
 水時規箱▲風曆赤繪升鉢水指



四七二 伊賀耳付花生 高九寸八分

四百八十圓にて土橋へ古書石巻扇面被屏風千
 四百圓にて園松へ山金地藤菊上屏風一雙
 三千三十圓にて中村へ光琳金地四季松屏風一
 雙六千三百九十圓にて中村へ峰崎松下關虎屏
 風一雙(鑑査状)四千二百圓にて土橋へ重雲
 岩川書畫押繪屏風一雙二千七百圓にて今定へ
 下村家傳來五十雙の内金地並松屏風三雙二千六
 百三十九圓にて土橋へ青雲獅子大香爐七百六
 十一圓にて中村へ唐物螺鈿瀨仙長角大平
 車三千三百圓にて今定へ唐物青貝書檯七百五
 十八圓にて桑原へ唐刀木夕顔時輪十種香具
 八百四十圓にて園松へ雪意圖橫物一千二百五
 十圓にて林新兵衛に明悅竹葉館(鑑査状)千
 五百五十圓にて林へ光殿司羅漢千三百二十一圓
 にて土橋へ松花堂岩一千三百圓にて林へ
 董其昌書三行千四百五十圓にて林分家へ黒村
 寒山樵夫遊覽五千八百八十圓にて堀本へ同春
 飲山水双幅千五百五十五圓にて今井へ應舉
 邊松三千三百二十八圓にて山中へ吳春
 (鑑査状)千六百圓にて林へ尙信金地松竹梅
 蘇馬屏風一雙三千六百八十圓にて高田へ下村
 家傳來五十雙の内金地並松屏風三雙千八百八
 十圓にて北岡へ同三雙千六百三十圓にて今定へ
 ▲唐雲獅子三千三百八十八圓にて林へ寛齋
 ▲蓬萊山中北極星迎南極星三千三百八十圓にて高
 田へ定家蜀芝和歌集四千四百圓にて土橋へ

二六五 南堂了菴墨蹟 巾丈一尺四寸八分



凡不違人性又不
 顯人曰三喜雲々
 一担楊柳烟人
 牛而月子者
 休天年
 唐化屏風と白
 牧而松の墨色
 遠く散らす心
 悠焉
 五十四年秋中

一五七 燕村寒山樵夫遊鹿 巾丈四尺一寸 尺五寸五分



四四八 祝世祿書真蹟 中丈 四尺九寸 尺七寸九分

竹如對道皆
 舊之帶
 門月數
 臨河只
 南
 祝世祿

十一月廿七日 輯由多す
○十一月廿七日 又しく清めん存るに子孫傳へたる
枝反素向中書存るに其之洞其云の御覧しに
の訃報の正書一通を録する。之んを清めん
のの一紙を抄ふ。其の西名も資料として其に
ひて多し。温故知新の由り此も其の類なり。訃報
之聖籍尺一尺八寸計りの黄紙に一寸五分四
方の明朝字を印刷したるものなり。長さ二丈六尺
寸七分五厘を一寸位を幅とありたるもの也。冒
頭は二寸四方許の訃の字あり。例るに法

之洞本邸の所在地も二寸四方計りにするも印
刷しあり。本文の内部に皇室に關係ある字
ハ朱摺とありあり。黄紙の上封の中央に
朱紙と藍紙を重ぬり執りお家の上は宛を
とす。別の一黄紙の聖二尺横一尺の名刺
とあり。即ち会葬するに對する謝状の名



姓名列記

刺也
支那の訃報を流るに
あるものなり也

第二回 大丸の入札

五日京都俱樂部に於ける大丸所藏書畫骨董第二回入札は前通より京都の各骨董商樓上樓下に夫々陣取を爲し各商店の得意夫々陳所に集合し各寶品につき十時より入札をなし午後六時半より開札したり千圓以上の品左の如し

▲無學祖元墨蹟二千五百二十八圓(山中)▲行端
 神御墨蹟二千八百八十八圓(林)▲東渡和尚墨蹟一
 千五百圓(林)▲牧溪見觀音千九百三十九圓(土
 橋)▲聖集三幅對子二百圓(林)▲沈南蘋柳に鴨
 橫物二千二百二十八圓(林)▲明光遠墨卷二千五百
 圓(北岡)▲探幽中周茂教左右春林山水三幅對二
 千八百圓(林)▲同筆莊子二千五百三十圓(中村)
 ▲常信中周茂教左右松竹三幅對三千九百圓(中
 川)▲同筆龍虎大變幅二千五百一十一圓(山中)
 ▲松花堂六祖墨蹟橫物千五百圓(高田)▲柳里墨
 蹟千五百圓(高橋)▲文徵明畫大橫物三千二百
 三十九圓(土橋)▲無村農夫山水千八百八十圓(中
 川)▲山岡大和遊仙詞詩三千九百二十圓(中川)
 ▲墨筆藤花狗子二萬二千圓(土橋)▲吳春深山
 遊鹿千二百六十八圓(土橋)▲觀仙樂に雙猿十八
 百圓(林)▲岸駒白鷺千六百圓(林)▲龍寶玉寶蓋
 石寶山觀關千四百二十八圓(高田)▲山樂金地
 二十四尊屏風千八百八十圓(山中)▲探幽四季山
 水屏風三千二百圓(北岡)▲金地雙松屏風二千六
 百三十八圓(山中)▲屏風二千二百圓(林)▲同
 屏風千五百六十圓(服部)▲平日梨地櫻川山水詩
 繪觀相三百圓(林)▲地獄飲茶詩繪歌書單前二
 千八百十圓(林)▲玉鏡之知間帖七千五百圓(林
 分家)▲青磁大燬合七千六百圓(林)▲萬曆茶粉
 稱鉢水指五千三百二十九圓(土橋)▲定家御小倉
 色紙五千五百圓(山中)▲一休通舟山水自讀讚八千
 六百三十三圓(中村)▲柳里春花龍七千六百八十
 圓(林)▲茶菴墨蹟千四百圓(林)▲吳春福祿壽七
 千六百圓(林分家)▲岸駒金指墨蹟札並中屏風三
 千五百十五圓(土橋)▲龍寶墨に帆々島棠に菊二
 枚折千九百六十六圓(土橋)

かくて十一時半全部の入札を終り此の日の總賣上金は約二十四萬圓にして土橋に落ちたる二萬二千圓の藤花狗子の注文主は倉敷の大原氏なり又其の二番札は林二萬圓 三番札は鳩居堂一萬八千八百圓なり

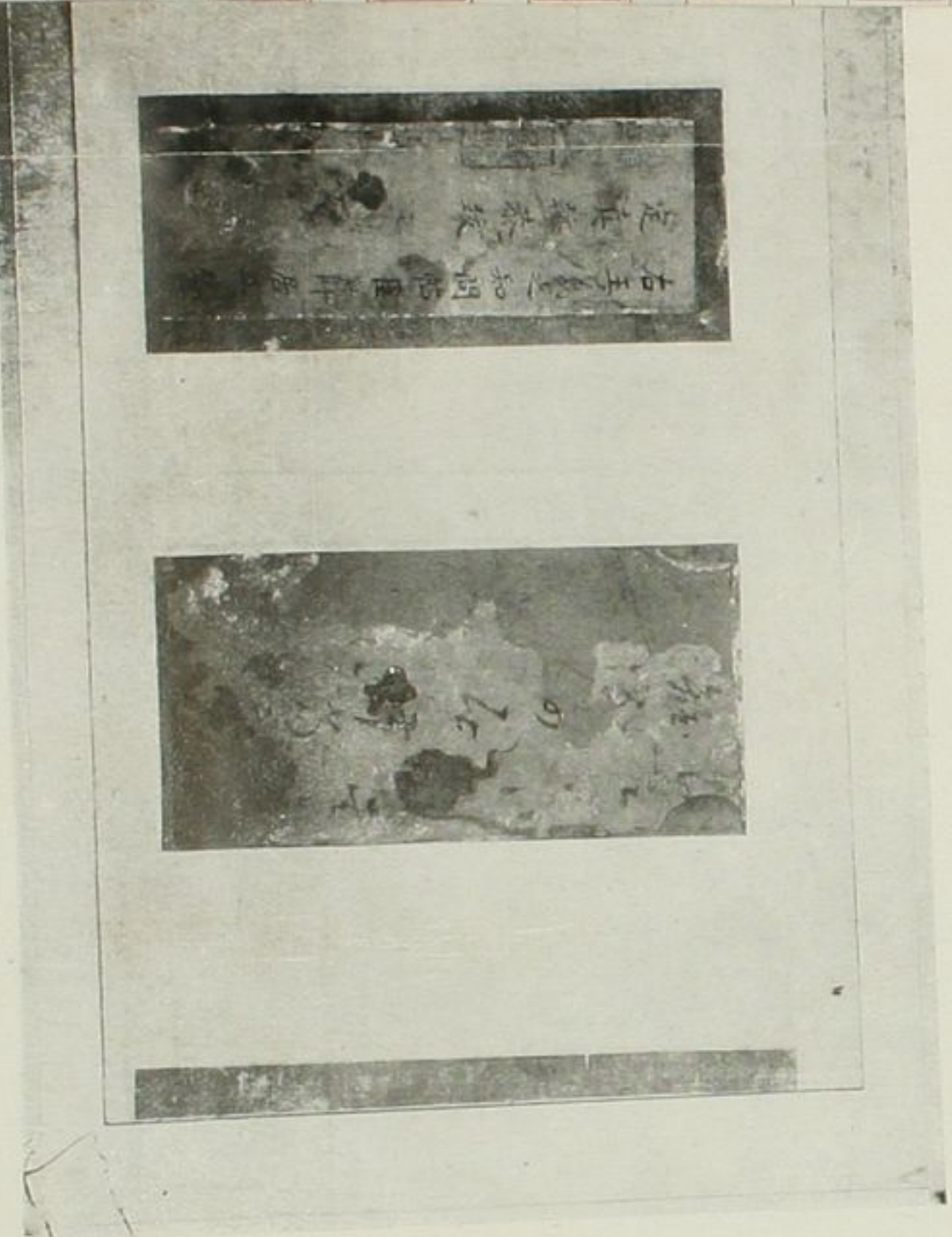
二萬二千圓の藤花狗子

片岡直温氏の手に落ち下村家珍蹟第二回入札は既記の如く五日午前十時より京都市美術俱樂部にて開會顔る好景氣を以て同夜十一時過終了せるが當日第一の呼び物たりし藤花狗子著色竹山管、藤花狗子圖の軸物は二萬二千圓にて土橋に落札其買取者は今回下村家の整理者たる片岡直温氏にして二番札は二萬圓にて林なりき尙ほ當日の重なる落札は左の如し

無學祖元墨蹟(二千五百二十八圓)山中落札▲行端神御墨蹟(二千八百八十八圓)林▲沈南蘋柳鴨橫物(二千二百二十八圓)林▲定家御小倉色紙(秋風に五百圓)山中▲光殿司運壽像(二千五百圓)北岡▲一休通舟山水書讀讚(八千六百三十三圓)中村▲探幽中周茂教、左右春冬山水三幅對(二千八百圓)▲同筆莊子(二千五百三十圓)中村▲常信中周茂教、左右屏風(七千六百圓)林▲萬曆茶粉稱鉢(五千三百二十九圓)土橋▲文徵明書大橫物(三千二百三十九圓)中川▲文徵明書大橫物(三千二百三十九圓)中川▲山岡大和遊仙詞詩(三千九百二十圓)中川▲吳春福祿壽(七千六百圓)林▲探幽四季山水屏風一雙(三千二百圓)北岡▲岸駒金指墨蹟(三千五百十五圓)土橋▲龍寶墨に帆々島棠に菊二枚折(千九百六十六圓)土橋

千二百圓)服部▲平日梨地櫻川山水詩繪觀相(三千五百圓)林▲萬曆赤繪柳鉢水差(五千三百三十九圓)土橋▲玉鏡之知間帖、吳春筆玉鏡之圖(藤花狗子)林分家▲青磁大燬合(七千六百圓)▲地獄飲茶詩繪歌書單前(二千八百十圓)林▲右の内一休通舟山水自讀讚は大原梅原龜七氏に、吳春福祿壽は近州長濱淺見又藏氏に、定家御小倉色紙は大原廣海仁三郎氏等の手に歸したるもの、如く王羲之知間帖は林分店の手張にて何方へも賣らざる筈なりといふ

○大丸市二回
 之と市一回
 七ぬ況を廿四
 弟田を博し得
 乃ちとてさる度
 而して其の景

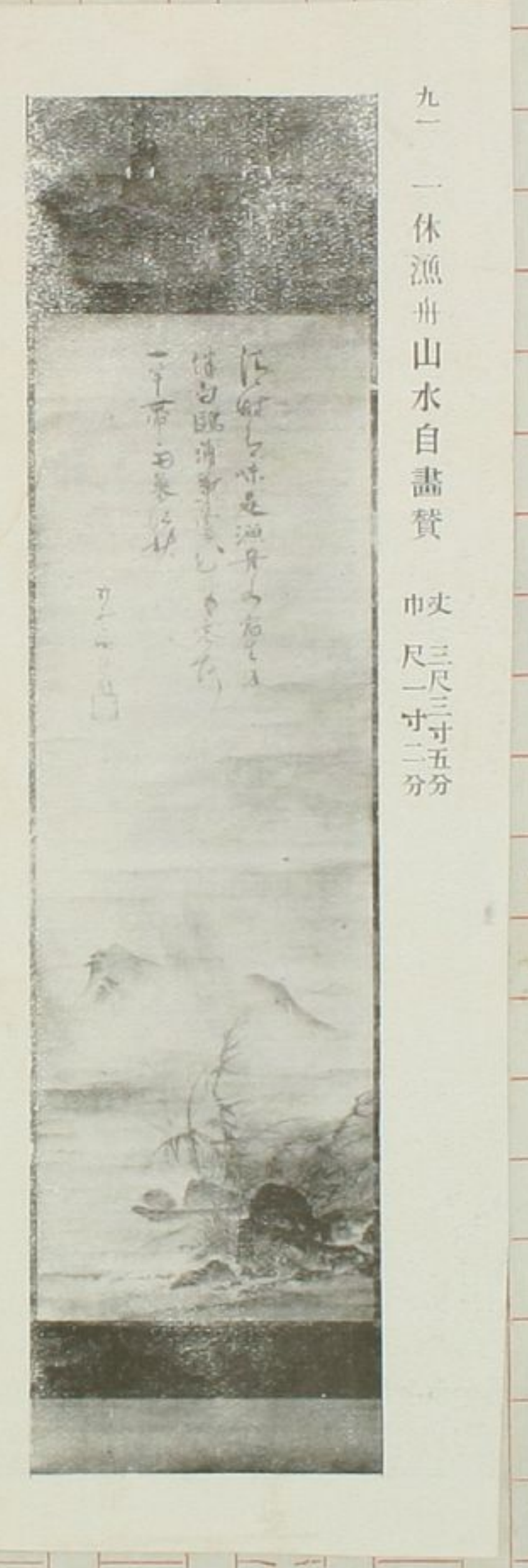


一 王羲之知間帖 諸大家跋
 吳春筆王羲之圖幅添 絹本着色 共箱

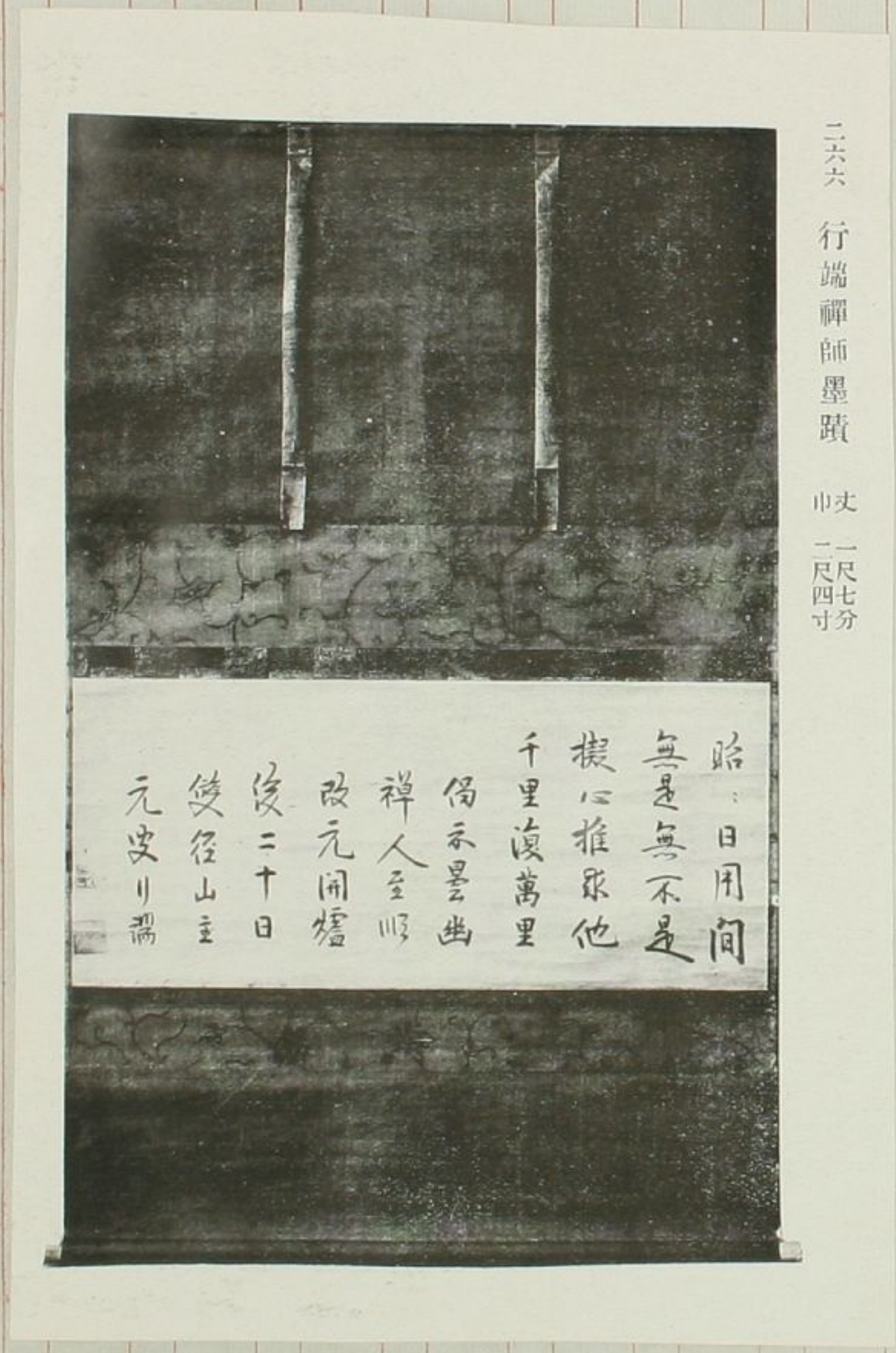
諸 大家 跋
 王 羲 之 知 間 帖
 吳 春 筆 王 羲 之 圖 幅 添
 絹 本 著 色 共 箱



一三三 應學藤花狗子 竹山贊 巾丈 四尺一寸八分 一尺九寸七分



九二 一休漁舟山水自畫贊 巾丈 三尺三寸五分 二寸二分



二五六 行端禪師墨蹟 巾丈 二尺七分 二尺四寸

路日用間
無是無不是
擬心推取他
千里波萬里
偈示墨幽
禪人至順
改元開禧
後二十日
雙徑山主
元史り端

三三二 東陵和尚墨蹟 巾丈 三尺三寸七分



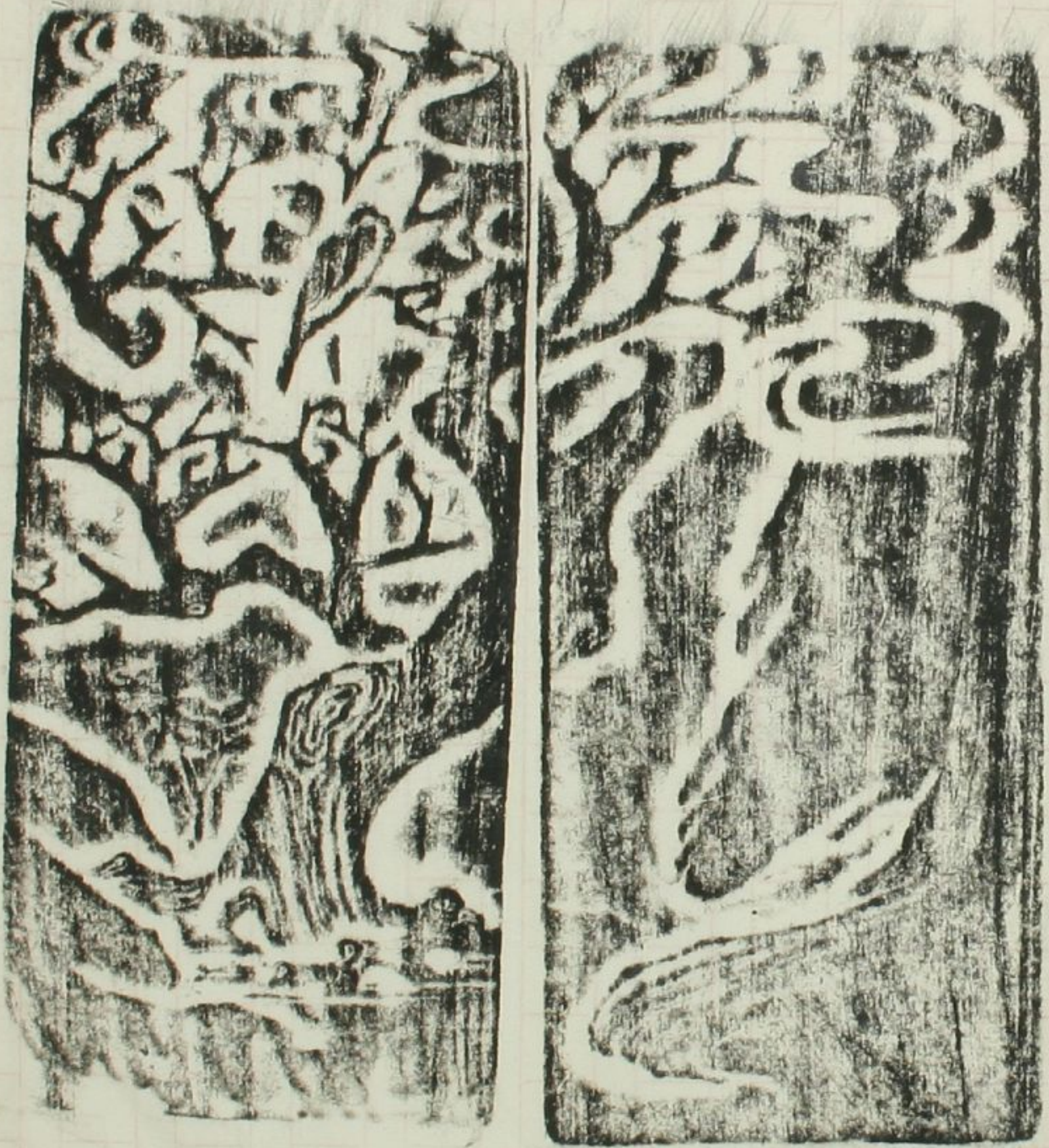
四七三 萬曆赤繪柿鉢水指 直徑 六寸一分 高三寸三分

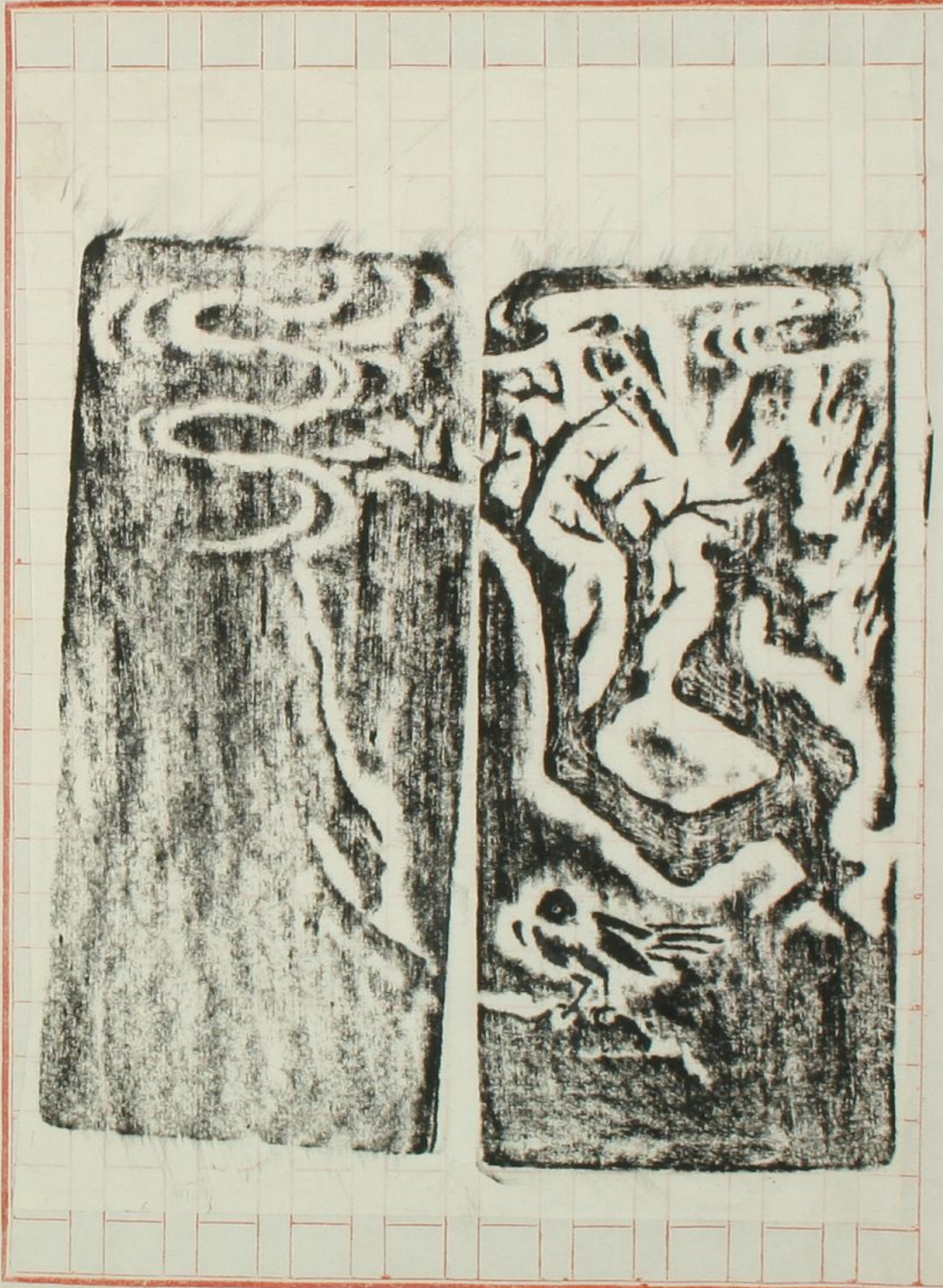


此を載やくる方ぬ衆り毎のち流るるを貯りき
 之のちくも、舊家の赤衣をまふ、このを信目
 上実の初き入りたる、こゝにぬめさ
 字もふとけさるる、今この字目を好むるよ
 りを好むる、其ま中の色(事也)十二月
 ハ(元)

〇此の風物、おかし、轉じて、河を、たぐ
 かし、このを、区戒を、破る、を、何の、おし、を、し
 骨董、物、を、あつ、て、何、う、を、ま、さ、せ、と、聞
 小鉢、之、流、る、を、あ、つ、た、の、ま、の、を、白、飯、大、印

二顆傍を閉くはるは十由と云ふ余余指動
 きる由半の傍に減七しえ後生購ひ入
 印高き四寸八分幅二寸二入四方全体純
 白くは斑理なく相帯の時代あり石
 玉傳りて四由の山石花を淡く彫り
 こう及忌らむき、題後芽ありそり、余首
 架中一六印無きよりあつてあつても大くして
 在るものよしと最とありあつて
 十三年十二月九日誌





日歲晚入るると色々の暮りゆくは生る身命を
 尺牘を集めしこといふ所をきりて居る所を
 古稿の世を暮らして暮らしてはあつた人
 の暮らゆめ即ち生れ自らも暮らゆめいそと
 暮ら中絶絶と暮らして併しコンテ坊々んあまき
 ん心古稿を集めし人所を由義をきりて買ね
 たり。此の古稿の如きは松本胤泰と暮ら
 二年半あつたは名義古稿二万五千餘
 通を一括して暮らして暮らしてはあつた
 こと七合りては白分の如きと暮らして暮ら

重祿しぬい部合よりうつくぬらしのいものう
ちうまび名を角武治の買ぬいことよしうい
まふ千入入るるあまふ、此入る中を教る
後身合ひる年刻若しと集ぬことすへ
とほふ、其の年若とあふるるゆをとあふ
又そのう(同)しう、買出ぬの二本の年の
親族の家入花しと名を寺前(也)古書珠
の題名あり 数ふはし(二)七(一)別：八ぬを一ハ
と、いんとあふ、数ふはし(二)七(一)別：八ぬを一ハ
と、いんとあふ、数ふはし(二)七(一)別：八ぬを一ハ

三十二家の方書、わりのあふ、数ふはし(二)七(一)別：八ぬを一ハ
山師の記、大田成、わりのあふ、数ふはし(二)七(一)別：八ぬを一ハ
茶山、数ふはし(二)七(一)別：八ぬを一ハ
あふ、数ふはし(二)七(一)別：八ぬを一ハ
許補、数ふはし(二)七(一)別：八ぬを一ハ
つひ、数ふはし(二)七(一)別：八ぬを一ハ
の前の記、数ふはし(二)七(一)別：八ぬを一ハ
余のあふ、数ふはし(二)七(一)別：八ぬを一ハ
と、数ふはし(二)七(一)別：八ぬを一ハ

○古林見直

僧澄月

三代弘訓

○宇佐美惠由

○秋野藤内之墨丸平

大竹蔭塘

○卷菱湖

○小可庵

○築田邦典號高子

○榊島石梁號舟木

○松崎操堂

○安井息軒

○伴蒿野

○海野遊翁

○川口長孺

○伴信友

○湯淺常山

○並川三氏

○遠山雲水

○僧中雲集

○菱川同山北河の心

○小石杜翁

○葉令大枝傳英

○古川吉和軒

○高嶺之西

○榎並陸遜林士

○前波點翁草堂

○藤崎小竹

市川○○

○川合清年寸三

○就草庵

○狩谷振齋

○僧六山

○篠崎三集

○宇野明霞

○八代弘覺

○塙二節

○万波醒庵傳前

○本村葦玄

○矢野玄道

○榎之茂雪翁

○加藤玄隆

○伊豆宗隆

○大寺春孝

○笠川淇園

○那波魯生傳前

○修藤和俊

○中根雪江

○林述之志

○小可白昌馬所

○西原武之好

○浦上玉奎

○小川行成傳前

○小原孫坡傳前

○志高玄貫

○日野南洞

○壹井彦翁

○ 永田觀奮
 中江雪樵
 芳川汲山 思久
 本長官長
 本長書子
 本田南畝
 谷之昆
 深東江
 長聖聖山
 高島能航

○ 貫名海庭
 小正禮庵
 清水月高
 龜田経源
 浦上春琴
 本田夏後
 坂田大守
 佛香山 海上寺
 三浦梅園
 尾高能

○ 宮崎筠圃
 仁井田南陽 比所
 若井松之助
 佛慈庵
 翠軒社輝
 廣原深由
 富子其 土師つとむ
 篠田蛭高
 佛雲堂
 大久保要人

○ 阿部正相 梅屋町
 立原四行
 高久疎林
 石川岩院 南表
 僧凡分 日加細
 大原各響 西
 香川桂園
 香川黄中 小島
 武元登三 祐

○ 齋藤太夫 丸
 羽衣 羽衣
 聖田笛雨
 橋守部
 藤田幸平
 藤田長子 竹男
 高川南流
 古坂洞居
 吉村 山
 廣原旭莊

○ 漁保航平 丸
 江川垣庵 丸
 翠嵐竹沙
 清水福光 丸
 藤崎長子 丸

菅沼斐雄の書

菅沼斐雄の書

以上百冊

外備前古簡六通

芳烈公宛

細政

備後守

宗仲宛

南条一守

能正七郎

井上全藏文草

成島和昌和文

近古十卷

総計百冊

丸

○先年京都においでさる大ぬのの師馬丸丸太
 町の下村の女をゆめを多く見るも手さしと
 ちと其後世を村の樵夫伐木しゆを親と書せし
 家持の人をゆめを余り旅人新き此物を探り
 んと此物と天流の流しと書と云くびまを
 よくえんは物かしきとめ自分も書りりんとい
 言ふも流しと書しと書しと書しと書しと書し
 書を流しと書しと書しと書しと書しと書し
 大ぬの書と書しと書しと書しと書しと書し
 と書しと書しと書しと書しと書しと書し

刻情して流るる大情接情の無くとも
家危いゆへに情を以てつてたてを
因り下村家より終るる回書と左の如し

大観帖

荷子の版

王氏書画気 の版
上評

韓元子の版

古字法考 の版
字本

志子 鶴田由珠入
朱摺

源氏物語 の版
樹製

泚江入楚 の版
字本

元版荘子 の版
北條の
字本

管子 の版

○古の紙をきり束ゆ米少くハる香木凌霄に因り
云々○此の紙堅二寸四五分横二寸此の紙を一
幅にきりてその小をきりて香木の紙をきりて
意小薄きをきりてその紙をきりて外に
と紙しく思ひをきりて江州家の紙をきりて
り多うく之れを江州家の紙をきりて
古の紙をきりて其の紙をきりて
紙をきりて其の紙をきりて
紙をきりて其の紙をきりて
紙をきりて其の紙をきりて
紙をきりて其の紙をきりて
紙をきりて其の紙をきりて
紙をきりて其の紙をきりて

とて、今ハ七を家御ノ仰し、とて、其ノ邊と
あふし

の柱を、根ハ細く、廣布を、とて、
其ノ邊、院の寺、函、中、点、と、
垂、延、の、し、の、四、五、を、
並、々、あ、り、若、し、の、松、林、松、の、祝、
し、之、を、桂、島、に、念、の、と、
手、拍、一、を、
形、因、の、
笑、古、自、也



又、玉、田、和、本、の、印、一、
路、(一) 花、を、梅、花、
大、和、授、(一) 加、
刻、
手、

淡、と、

花、和、信、

あ、る、

芥、

し、

中、人、余、

印、

梅水月在子



唯、美、の、歩、
旭、堂、

以下全て
白紙

